

触覚の記憶における言語陰蔽効果の検討

北神 慎司

(島根大学法文学部)

key words : verbal overshadowing effect, tactile memory, recognition

言語陰蔽効果 (verbal overshadowing effect; e.g., Schooler & Engstler-Schooler, 1990) とは、狭義には、“再認前の言語化が顔の記憶に対して妨害的に働く” という現象を意味し、広義には、“非言語情報の記憶や認知に対して言語化が妨害的に働く” という現象を意味する (北神, 2000)。後者の意味における言語陰蔽効果は、これまで、さまざまな課題や材料によって示されている。例えば、地図の記憶、(香りも含めた) ワインの味の記憶、音楽の記憶などが挙げられる。すなわち、感覚モダリティーの別で言えば、視覚、聴覚、味覚、嗅覚において、それぞれ言語陰蔽効果が生起することが確認されている。しかし、触覚については、まったく検討されていない。

触覚の記憶において、言語陰蔽効果が生起するという可能性は、これまで提出されてきた言語陰蔽効果の理論的説明から考えることができる。再認課題を例にとり、端的に言えば、ターゲットとディストラクターの弁別に対して、言語的な処理、もしくは、言語的な記憶表象が有効でない場合に、言語陰蔽効果が生起しやすい、とされている。つまり、触覚は言語化が困難であることは容易に予測できるため、言語化が、その記憶に対して、妨害的に働くのではないだろうか。

ただし、言語化が常に妨害的に働くわけではない。その一例としては、Kitagami et al.(2002)の研究が挙げられる。彼らは、顔写真を材料として、テストセット(ターゲットと複数のディストラクター)の類似度を操作して言語陰蔽効果の生起因を検討しており、類似度が高い場合にのみ言語化の妨害効果が見られ、低い場合には言語化の効果がないことを示している。このように、テストセットの類似度が、再認成績に大きく影響することは、これまでの再認記憶研究によって示されており、触覚の記憶においても、テストセットの類似度によって、言語化の効果異なることが予測される。

そこで、本研究では、触覚でも、特にその記憶において、言語陰蔽効果が見られるかどうかを検討することを主たる目的とする。さらに、テストセットの類似度の違いによって、言語化の効果異なるかどうか併せて検討する。

【方法】

デザインと被験者: 被験者数は184名。デザインは、言語化(あり/なし)×テストセットの類似度(高/低)の2要因計画で、類似度は被験者内要因。複数の実験者による小集団実験。

材料: 7種類の紙やすり(#100,120,150,180,240,320,400)を用いた。学習刺激としては、#150,#180,#240,#320の紙やすりを用い、再認課題時に、学習刺激(ターゲット)と同時に提示する2枚のディストラクターは、類似度判断の予備調査によって組み合わせを考慮した。例えば、#150の紙やすりがターゲットである場合、類似度高条件では、#120と#180をディストラクターとし、類似度低条件では、#100と#180をディストラクターとした。

手続き: 被験者一人当たり、類似度条件の同じ試行を2回ずつ(高・高・低・低または低・低・高・高の順)、計4試行にわたってそれぞれ以下の手続きが繰り返された。まず、学習時には、紙やすりを目に見えない位置に置き、20秒間で紙やすりの触った感覚を覚えるように求めた(意図学習)次に、挿入課題が1分間行われた後で、言語あり群の被験者は、5分間で学習刺激について、いくつかの観点別に言語描写を行

うように求めた。また、言語化なし群の被験者は、フィラー課題を行った。最後に、学習時に提示された紙やすり(ターゲット)と2枚の紙やすり(ディストラクター)の中から、学習時に触ったものを選択する、強制選択式の再認テストが行われた。なお、ターゲットの位置は、カウンターバランスされており、ターゲットに組み合わせられるディストラクター(類似度高、低の2種類)は、試行によって異なっていた。また、再認判断に加えて9段階の確信度も併せて評定させた。

【結果と考察】

図1に、各群における修正再認得点の平均を示した。修正再認得点とは、再認判断と確信度得点の両方を組み合わせたものであり、算出方法は次の通りである(Dodson et al., 1997)。被験者の再認判断が不正答(F.A.)の場合で、かつ、確信度評定で7,8,9と評定している場合は1点、4,5,6と評定している場合は2点、1,2,3と評定している場合は3点とし、再認判断が正答(Hit)の場合で、かつ、確信度評定で1,2,3と評定している場合は4点、4,5,6と評定している場合は5点、7,8,9と評定している場合は6点とした。

予備的分析として、類似度高条件の2試行を先に行うか、低条件を先に行うかという順序の効果を調べるために、順序×言語化×類似度の3要因分散分析を行った。その結果、順序の要因に関わる主効果および交互作用は見られなかったため、以下では、両群のデータをまとめて分析を行った。

被験者ごとに算出された修正再認得点をもとに、言語化×類似度の2要因分散分析を行った結果、類似度の主効果と言語化×類似度の交互作用が有意であった。さらに、下位検定の結果、言語化あり群における類似度の単純主効果と、類似度高条件における言語化の単純主効果がそれぞれ有意であった。つまり、触覚の記憶においても、言語陰蔽効果が見られると同時に、Kitagami et al.(2002)の結果と同様、類似度が高い場合にのみ言語化の妨害効果が見られ、低い場合には言語化の効果が見られなかったことから、触覚の記憶における言語陰蔽効果は、テストセットの類似度に影響を受けることが示唆された。

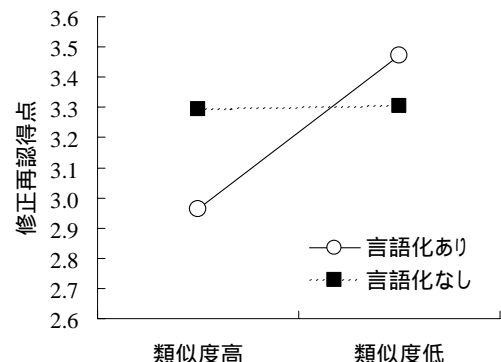


図1 各群における修正再認得点の平均

【付記】

本実験の計画・実施にあたって、島根大学法文学部の加門陽子さん、北川桂子さん、豊島美佳さん、三宅裕子さん(50音順)のご協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

(KITAGAMI Shinji)